



ひらほく新聞

発行所 読売センター平塚北部(ひらほく) 山本 直 〒254-0013 神奈川県平塚市田村9-4-32 電話 0463-54-2807

「ひらほく新聞」で検索!
★感謝で継続11年半★
<http://www.hirahoku.com/>
☆ぜひ、バックナンバーをどうぞ!



2月27日、愛読紙日本講演新聞主催のスペシャル講演会があり、ZOOMにて、浄土真宗の僧侶、大來尚順(おおき・しょうじゅん)さんの感動講演を拝聴。長く翻訳・通訳の仕事もされてきた大來さん曰く、昔からある日本語には仏教精神が宿っていることに気づいたが、現在は日常会話の中で言葉が形骸化し、その精神が分からなくなっているという。いま、あらためて伝えたいという大切な教えを有難くご紹介いたします。

英語に訳せない日本語

大來さんは、龍谷大学を卒業後、米国仏教大学院に留学。その後、ハーバード大学神学部の研究員となり、帰国後は僧侶として以外に翻訳や通訳、執筆、講演活動もされてきた。住職を務める超勝寺は、山口市にある約400年続くお寺で、今年2月にお寺を継ぐため東京から戻られたという。

日本語に込められた

仏教精神

大事なことは、当たり前すぎて、すぐそばにあるのに気づかない。大事な教えによつて生かされている私たち、伝えたい、その「仏教精神」も、近すぎて見えていないもの。日本の文化の中で、「仏教精神」が一番如実に現れているのが、誰もが日頃当然のように使っている『日本語』である。日本語の多くは、仏教用語ともいわれ、その一つひとつの言葉の根底には、「仏教精神」が込められている。

なぜ、日本語として「行って来ます」という、「また再会する」という言葉を毎回使うのか…。それは、「また会える」という確証がない」から。

おそらく皆麻痺している。これまで何万回、何十万回という回数、出かけてたまたま帰って来ただけ。それが当たり前のように思っているだけで、決して当たり前ではない。

一歩家を出たら、何が起こるか分からない。事件、事故、災害…。こういつたことで悲しい思いをされる方は実はたくさんおられる。たまたま皆さんはこれまでそういう境遇に遭わなかっただけで、これが現実。

「諸行無常」という。

だからこそ、よく帰ってきたね!という「たたいま」という言葉が生きてくる。

奥深い意味合いを知らずに使っている人がほとんどです。5つの大切な日本語を詳しく解説いただいたなかから、以下一話のみをご紹介します。

『いってきまう』の意味

誰もが出かける時に「いってきます」と挨拶すると思う。でも、その際に、「家族の方へきちんと目を合わせて、いってきます」と言っている方はほとんどいない。

でも、その辛さ、不安を和らげてくれる、「俱会一処」という教えがある。「ともに浄土で会う」という意味で、死後の世界で必ず再会できるので今を一所懸命生きて下さいという教え。

一年に大事なお子さん一人を交通事故と自害で亡くされた僧侶の方のお話。

子どもたちの待つ世界へ行こうと何度も自殺未遂を繰り返し、今日こそはお墓で死のうとした時、目に飛び込んできた言葉が「俱会一処」だった。

「我が子は仏となつて私に人生の無常というものを、生きるということ身を挺して教えてくれている。これを受け止めて生き抜かなければ、私は上くなつた後、子どもたちに会わせる顔がない」と思い、生きる選択をしたという。「俱会一処」の言葉によって、「生きる選択」ができ、救われた方がたくさんいる。

私たちは、実はこうした大切な教えに常に包まれて、生かされている。普段、いろんな方の親切心、優しさ、働きというものによって有難く生かされている。しかし、誰もが近すぎて見えていない。ぜひ、普段何気なく使っている日本語に、そういう驚くような真実が隠されていることを知っていただきたいと思う。

ここからは大來さんの著書「楽に生きる」から一話をご紹介します。

できなくなつたことを嘆くより、新たな「幸せ」を大切に

以前と比べて「力仕事ができなくなつた」「物覚えが悪くなつた」など、「老い」というものを目の当たりにするようになったとき、一番楽な考え方は「それはもう自分にとって必要ではなくなつた」「不要なもの」が淘汰された」と割り切って受け止めること。

そのことに執着したり、どうにか失われた能力を取り戻そうと必死になることは火に油を注ぐようなもの。かえって悩みは大きくなり、疲れてしまう。

「こんなはずじゃない」「自分ではできるはず」というその執着を手放すことが最も身体的に負担の少ない気持ちの整理の仕方だと思ふ。しかし、そうはいっても嫌な現実を簡単に受け止めることはできないから辛い。

そんなとき、この複雑な気持ちと和らげるのに役立つ考え方があふ。それは身体的に変化が生じ以前と同じように物事ができないと

しても別の方法で物事ができるように工夫すること。つまり、直接的ではなく間接的に物事を上手く運ぶ方法を探していくこと。

このような考え方を取り入れていくと少し肩の力が抜ける。そして、何度か試行錯誤を繰り返すことにならるが、徐々に受け入れ難い現実への抵抗も少なくなってくるのではないかと。そして執着を手放すことにつながる考え方がもう一つある。それは、逆に「今までできなかったことが、できるようになったことがあるのではないかと」考えること。

変化の流れというのは、何も失っていくことだけを意味するものではない。その流れの中で、以前には無かった能力が身につくこともあるのではないかと。これは、身体的なことだけに限らない。以前はできなかった物事の考え方や、受け取り方なども含まれる。たとえば、これまで嫌悪感を抱いていた物事を好意的に思うようになったり、嫌いだつた食べ物を食べられるようになったり。または、面白くないと思つていたことが面白くなつたり。このように、変化の流れは肯定的なことだけではないのではないかと。

卒業式、涙の

「最後の授業」

大畑誠也（九州ルーテル学院大学客員教授）

私が考える教育の究極の目的は、「親に感謝、親を大切にする」です。高校生は多くは最後まで自分一人の力で生きてきたように思っている。親が苦労して育ててくれたことを知らないんです。

これは天草東高時代から継続して行ったことです。このことを教えるのに一番ふさわしい機会として、私は卒業式の日を選びました。式の後、三年生と保護者を全員視聴覚室に集めて、私が最後の授業をするんです。

そのためにはまず形から整えなくちゃいかんということ、後ろに立っている保護者を生徒の席に座らせ、生徒をその横に正座させる。そして全員に目を瞑らせてからこう話を切り出します。

「いままで、お父さん、お母さんにいろんなことをしてもらったり、心配をかけたりのりただろう。それを思い出して。交通事故に遭って入院した者もいれば、親子喧嘩をしたり、こんな飯は食えんとお母さんの弁当に文句を言った者もある……」。そういう話を

しているうちに涙を流す者が出てきます。

「おまえたちを高校へ行かせるために、ご両親は一所懸命働いて、その金ばたたくさん使いなさったぞ。そういうことを考えたことがあったか。学校の先生にお世話になりましたと言った前に、まず親に感謝しろ」

そして「心の底から親に迷惑を掛けた、苦労を掛けたと思う者は、いま、お父さんお母さんが隣におられるから、その手ば握ってみろ」と言うわけです。

すると一人、二人と繋いでいって、最後には全員が手を繋ぐ。私はそれを確認した上で、こう声を張り上げます。

「その手がねえ！ 十八年間おまえたちを育ててきた手だ。分かるか……。親の手をね、これまで握ったことがあったか？ おまえたちが生まれた頃は、柔らかい手しておられた。いま、ゴツゴツとした手をしてられるのは、おまえたちを育てるために大変な苦労をしてこられたからだよ。それを忘れるな」

その上でさらに「十八年間振り返って、親に本当にすまんかった、心から感謝すると思う者は、いま一度強く手を握れ」と言うので、あちこちから嗚咽が聞こえてくる。

私は「よし、目を開けろ。分かったや？ 私が教えたかったのはここたい。親に感謝、親を大切にす授業、終わり」と言って部屋を出ていく。振り返ると親と子が抱き合って涙を流しているんです。（おわり）

以前ご紹介したことのあの感動実話ですが、卒業式シーズンにあたり、『致知』42年の歴史を振り返り、その出会いの中から365人の言葉を選びだし、1冊の本としてまとめた**致知出版社刊「1日1話、読めば心が熱くなる365人の仕事教科書」**に掲載された、2月5日分からご紹介しました。こちらの書籍は、140万人のレビューを有する国内最大級の読書コミュニティサイト「ブックログ」で2020年の年間ランキング第1位に輝きました。

私のこれまでの有難い縁の和田裕美さんや、白駒妃登美さん、高橋恵さんも登場。超オススメの書籍です。

「足るを知る」 生き方

調和しながらも成長していく生き方の良きモデルを、私たちは自然界の中に見いだすことができる。弱肉強食は自然界の掟だといわれているが、たとえ

は百獣の王ライオンであっても、一度狩りをして腹が満たされれば、一週間ほど獲物がすぐそばにいても襲うことはしない。欲のおもむくままに貪っていたら、いざ自分たちの食料事情を自分であやうくしてしまうことを本能的に知っているからだ。

京都大学の霊長類学者であられる伊谷純一郎先生のお話によると、チンパンジーは草食動物だと思われているが、ときには牛や羊などの大型哺乳動物を襲うこともあるそうだ。動物性タンパク質は栄養も高く、美味なので、そのご馳走を群のみんな喜んで食べるという。

それほど高価値の食料なら、しょっちゅう動物を襲ってもよさそうなものだが、彼らはそうはしない。その頻度は定かではないが、「たまに」しか捕らえようとしな。生きていくのに必要な栄養分だけを捕食し、それ以上はやはり貪ろうとはしないという。

この話を聞いたとき、私は自然界にあって人間界にはない「節度」を感じた。生存のための必要最低限の努力はするが、欲望を過剰に拡大させるような振る舞いは決してしない。「足るを知る」本能が、彼らには備わっているのだ。

また、伊谷先生は次のような話もしてくれた。アフリカに調査に行くとき、いわゆる焼畑農業によってタロイモなどの作物を作っている現地の人たちの集落がある。森林を焼いて畑にする焼畑農業では、1つの場所で収穫を行うのは二、三年が限界で、それ以上連作すると土地の養分がやせ細ってしまう。すると彼らは、次の区画を焼き払って畑とし、そこに種をまいて作物を得る。そこで二、三年連作すると、また次の区画に移って……ということを繰り返すそうだ。

しかし、焼く場所は無制限に拡大していくのではなく、たとえば10区画くらいをめぐる、再び最初の区画に戻ってくる。そのころになれば最初に焼いた場所にも十分に栄養が戻り、森林も育っているからだ。

あるとき、伊谷先生たちが毎年のように立ち寄り集落を訪れたとき、いつもなら、もてなしのご馳走を振る舞ってくれる集落の人がすまなそうな顔で、「今年には食べるものがないのです」といったそうだ。

理由を尋ねると、その年には各国の調査隊が訪れて、そのたびにご馳走しているうちに自分たちの食べ分まで足りなくなってしまうらしい。先生は気の

毒がつて持参してきた食料を少し分けてあげたそうだが、その時浮かんた疑問を素直に口にしてみた。「食べ物足りないのなら、もっとたくさん焼畑をつくったらどうですか」

集落の長老の答えは……「それは神さまが許さない」制限なく森を焼けば、自然の再生力を壊して、それが自分たちの首も絞めてしまふことを彼らは知っている。原始的な環境に置かれた人たちは「足るを知る」という節度を心得ているのだ。

（稲盛和夫著「心。」より）

2015年7月号で、小林正観先生の『知足のつくばい』〜吾唯足るを知る〜のお話をご紹介した。

「当たり前だと思ってしまう、誰かの努力や協力で成り立っているということ、す」「あの日見た光景から想像できないほどの希望の未来に復興が進んでいきます。これからの10年。私たちが新しい日本の力になれるように歩み続けます」

今を生きられることへの感謝と、そして未来への思い。2年ぶりの選抜高校野球大会、仙台育英（宮城）の島貫丞主将の「希望の宣誓」は実に感動的だった。

風の時代は、空気感や精神など見えないものへの意識が価値基準となる。コロナ禍の教えとして、その「気づき」を大切にしたい。



編集後記

「足るを知る」に関連して前述、大來さんの書籍では、自分の「外側」ではなく、できる限り「内側」に幸せを求めていく生き方、「小欲知足」という教えがあった。実践には、渡辺和子さんの「置かれた場所で咲きなさい」の教えの如く、自身の置かれている足を冷静に確認しながら、内側へ「根を下へ下へと降りろしていく」こと。最終的に行き着くのが、自分が生きていること自体が「有難い」「希有なこと」である「気づき」になるという。

「当たり前だと思ってしまう、誰かの努力や協力で成り立っているということ、す」「あの日見た光景から想像できないほどの希望の未来に復興が進んでいきます。これからの10年。私たちが新しい日本の力になれるように歩み続けます」

今を生きられることへの感謝と、そして未来への思い。2年ぶりの選抜高校野球大会、仙台育英（宮城）の島貫丞主将の「希望の宣誓」は実に感動的だった。

風の時代は、空気感や精神など見えないものへの意識が価値基準となる。コロナ禍の教えとして、その「気づき」を大切にしたい。